

愛情表現の日米語対照研究

異文化コミュニケーションゼミナール 1216099 杉田 実咲

1. 研究動機・研究目的

本研究では、日米語の恋愛映画における、愛情表現について検討した。会話とその返答にみる言語表現、また、会話の前後に見られる非言語表現を分析した。愛情の定義は「相手に対して向ける愛の気持ち」(広辞苑第6版)とし、本研究における愛情表現の定義は、「恋愛的感情を抱く対象(男女間)への愛を言葉や行動で表現して伝えようとする行為」とした。研究結果をもとに、日米の愛情表現の類似点や相違点を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

本研究では、日米語の男女間のラブストーリーを題材とした映画における相手に対する発話とその前後に見られる行動を分析対象とした。言語表現の定義は、相手に対して好意を汲み取れる表現とし、各国の特徴や、共通点を分析した。非言語表現の定義は、会話の前後に見られる行動の中で、相手に対して行った行動とし、日米語それぞれの映画において、相手に対して行った非言語表現の種類や使用回数を分析し、比較した。言語表現に関しては、愛情表現の使用頻度、各言語に飲み観察された愛情表現、日本映画と米国映画の両言語に観察された愛情表現、呼びかけ表現の差違、愛情表現を含む発話の文型を分析した。非言語表現に関しては、日米語の男女間の恋愛映画において相手に対して使用した非言語表現の種類と使用頻度を分析し、日米語で比較した。本研究では言語表現の前後に観察された行動をカウントした。非言語表現は、キス・抱き合う・性行為・手を繋ぐ・プレゼントを渡す・アイコンタクトに分類した。

3. 主な結果と考察

本研究では、日本語と米語の映画各5本中における愛情表現の使用頻度を、言語と非言語に分類し比較した。日米語の総時間数はどちらも600分とした。言語表現に関し、愛情表現を含む発話数は、日本語の映画は36回、米国の映画では51回と、米語の方が15回多かった。米国と比べて日本の場合、自己主張はせず、感情を表現することにためらってしまう特徴があり、「愛してる」や「とても美しい」といった表現をことばで伝える習慣が少ないことが示された。一方米国の場合、思ったことをことばにして伝える習慣があり、いつも本音で自然体な人が多いことが示された。愛情表現を含む発話数の差違にはこういった日米の文化の差違が大きく影響していると考えられる。また、両言語を男女別に比較すると、日本語の映画は男性かが67%、女性が33%であった。一方米国の映画では、男性が59%、女性が41%であった。日本は男性の発話数が約2倍であった。一方米国は、日本ほど著しい差違は観察されなかった。このことは、日本人女性に比べ、米国の女性は好意を持つ相手に積極的に意思表示することを示している。呼びかけ表現に関しては、日本の最も多く観察された呼び方は、「葵海」「りた」などの個人名と「大介くん」「羽鳥ちゃん」などの敬

称が同率で36%、米国は、“Alex”“Enoch”などの個人名が67%であった。また、米国に関しては、敬称と職業名は1つも観察されなかった。個人名に関しては、米語が日本語の頻度の2倍ということから、米国の方が使用される頻度が多いことが示された。また愛称に関しては、日本が6%、米国が19%であったことから、米国の方が親しみを込めて名前を略して呼ぶ呼び方が多く使用されていた。これは米国でニックネーム文化が浸透していることが映画に反映したと考えられる。文型に関しては、平叙文が両言語とも75%前後、命令文・疑問文は10%前後と著しい差違は観察されなかった。また、両言語とも感嘆文は観測されなかった。この結果から、両言語とも愛情は平叙文で表現されることが示された。非言語表現に関し、日米語の恋愛映画において相手に対して使用した非言語表現をそれぞれの行動の種類と使用頻度を分析し、日米語で比較した。日米語の恋愛映画における非言語表現の使用回数は、日本語が10分間に0.8回、米語が10分間に1.0回と、米語が多い結果となった。キスは日本語が38%、米語が63%と米語が約2倍の頻度であった。米語の方がすべての非言語表現において日本を上回ると予想していたが、抱き合う・手を繋げでは日本が米国を上回る結果となった。

4. 結論

本研究において、愛情表現を含む発話数、愛情表現を含む非言語表現の使用回数どちらも米国の方が多く観察された。一方呼びかけ表現や、愛情表現を含む発話の文型の割合は両言語に著しい差違は観察されなかった。愛情表現を含む発話に関して、日本映画では、相手がどう思っているか聞く表現や、相手の立場になって考え、相手を安心させる表現が多いことが特徴としてあげられた。一方米国映画は、相手を最上級に褒める表現や、相手のすべてを受け入れるという表現が多いことが特徴としてあげられた。非言語表現に関して、抱き合う・手を繋ぐでは日本が米国を上回った。これは日本の文化や社会の変化が非言語表現に反映していると考えられる。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を卒業論文として形にできたのは、須藤先生が丁寧にかつ明快なご指導をさせていただいたおかげです。深い感謝の意をお伝え申し上げます。また、仲間と共に2年間笑顔の絶えないゼミ活動を行えることができ、とても幸せだったと感じます。ゼミ生のみんなにも感謝を伝えたいです。来年度から社会人として新たな道を進むこととなりますが“Play hard, study hard”をモットーにこれからも頑張っていきます。